

禅文学の特殊性 —— 道元の教えと良寛

The Particularity of Zen Literature

Dôgen's teaching and Ryôkan

石上・イアゴルニッツァー 美智子*

Two kinds of works seem to exist among the literary works based on life: firstly the works which spring spontaneously out of the life fully lived by the authors, and secondly the ones composed consciously by the authors with their own or others' lives as material. Zen literature falls into the first category.

Then what is the particularity of Zen literature which flourished in the Middle Ages in Japan, first with the Shôbôgenzô of Dôgen, then with other works of Zen masters under the name of Gozan literature?

Isn't it paradoxical that the experiences of Zen life are communicated by the very words that Zen monks are supposed to disdain?

Dôgen says clearly in his Shôbôgenzô that beside the normal logical language there exist "words of insight" which spring out of "bodhi" (insight) and contain inner experiences inexplicable in normal language.

The particularity of Zen literature is in these "words of insight"

The concrete example of Ryôkan, one of Dôgen's faithful disciples of the Edo era, shows that Dôgen's essential teaching was understood and practiced by Ryôkan.

However the latter chose what pleased him among the written messages of his master, himself creating an original way of zen.

* ISHIGAMI-İAGOLNITZER Michiko, フランス国立科学研究所研究員

先ず文学一般における禅文学の位置について語り、次に禅文学の特殊性、更に道元の教えと良寛、最後に文学作品と読者の関係、良寛の独創性について話したいと存じます。

I 文学一般における禅文学の位置

本来、生活に基づいた文学作品にはその成立からいって二種類の作品群があるように思われます。まず第一に充実した生活があってそこから自然に湧き出てくる作品、第二に作家が生活を材料として苦心して構成する作品とです。不思議なことに、この二つの違った過程を経て成立した作品はいずれもすぐれた文学作品であり得ます。

第一のグループに属する作品は、中世では日本の禅文学、つまり禅僧によって書かれた作品、ルネサンス期ではモンテーニュの「随想録」(Essais)、近代では例えばゲーテの「詩と真実」などがあります。モンテーニュははっきりと、自分の一番大事な仕事は生きること、エッセイはその表現にすぎないと云っています。ゲーテの生涯を見ますと、まず恋愛や友情や旅行に満ちた生き生きとした生活があり、彼の散文や詩はそこからあふれ出てくるものであることがわかります。

第二のグループに属する作品は、二十世紀では疑いもなくマルセル・ブルーストの「失われし時を求めて」です。ブルーストは「見出された時」の中で、真の生は表面的な日常生活の中ではなく、文学作品の中にある。⁽¹⁾ 彼の作品は石工が石を一つ一つ積み上げて大教会堂を作り上げるように、自分があちこちから丹念に集めた生活や人物の印象を一つ一つ構成して作りあげた建築物であると自信をもって云っています。彼はこの仕事を死ぬ前に完了するため、自分の生活を犠牲にして、病身をむちうち、徹夜で何年も働き続けました。トーマス・マンは「トニオ・クレーゲル」の中で、無心に生活を享有している一般の人達に較べて、たとえ感動の涙に眼をぬらしながらも(自分の人生の貴重な瞬間を作品の材料として使うため)そうした自分を冷静に観察しなければならぬ作家の宿命を一種の呪であると見做しています。

では日本文学の中でも特殊な地位を占める禅文学の特殊性について見てみましょう。

Ⅱ 禅文学の特殊性

中世日本において禅文学と呼ばれるものは、禅僧が仏の教えを弟子達に語ったものを本人又は弟子が書きとめたもの（法語又は語録）、禅僧が自分の禅境を漢詩に表現したもの、老師と弟子の心境が一致して、老師が弟子に印可を与える際に書いた五言又は七言の漢詩（偈頌、巴利語、梵語の gāthā の意識）、また老師が往生の際に、四言又は五言、四行の漢詩にその時の心境を要約したもの（遺偈）等からなっています。

禅は生活体験なりと云いますが、その生活である禅からにじみ出て来る言葉が禅文学を構成しています。

多くは漢文で書かれ、室町時代には五山文学といって、京都及び鎌倉の五山⁽²⁾の禅僧が書いた作品が花を咲かせた時代がありました。この五山文学の栄える前、禅文学の全く初期、鎌倉時代に道元禅師（1200－1253）が立派な日本文で書いた「正法眼藏」（1231－1253に著作）は禅文学中の傑作であると見做されています。⁽³⁾ 道元の弟子懷辨も日本語で道元の日々の教えを書きとめました。それが「正法眼藏随聞記」（1234／5～38に記録）であります。

一般に禅は「不立文学、経外別伝」、つまり経文によらず、言葉によらず、師から弟子への面授によって伝達されるものとされていますが、それでは、禅修業上の教訓、禅境の表現、印可の為の偈頌、老師臨終の際の遺偈など、禅僧にとって画期的な一生の大事が、禅者が「月をさす指にしかすぎぬ」と見做す文学によって表現されるのは矛盾ではないかと言う人があります。

この問題は道元が「正法眼藏」の中で解決しています。

「正法眼藏」、「仏教」の中で道元はこの「教外別伝」説を批判して、仏陀の教えは師から弟子へ、心から心へ直接伝達されるのであって、經典による伝達はありえないというのは間違いだと云っています。

「ただ一心を正伝して仏教を正伝せずといふは、仏法をしらざるなり…かる

がゆゑに教外別伝の謬説を信じて仏教をあやまることなかれ。もしなんちがいふがごとくならば、教をば心外別伝といふべきか。もし心外別伝といはば、一句半偈つたはるべからざるなり。もし心外別伝といはずば、教外別伝といふべからざるなり」。

道元は「正法眼藏」「諸惡莫作^{まぐさ}」の中で次の例をとって具体的に説明しています。

「しるべし諸惡莫作⁽⁴⁾」ときこゆる、これ仏正法なり… しかのごとくぎこゆるは無上菩提のことばにてもある道著なり。すでに菩提語なり、ゆゑに語菩提なり。」(菩提は梵語の bodhi でやさしくいえばさとり、英語で insight と訳されています。)

つまり人間の二元的論理を表現する普通の言葉のほかに、菩提つまりさとりを包含し、さとりをそのまま表現する言葉があるということです。

懷井の「正法眼藏随聞記」の中で、道元は自分が過去に文学をたしなみ、良き表現をしようと試みたことを悔み、弟子達に文学への過度の傾倒をたしなめ、論よりは座禅実行が大切であると説いています⁽⁵⁾、一方さとりをそのまま表現する言葉を書き留めることは重要であると言っています。

「心ニ思ハンホトヲ書タラン、文筆不_レ調トモ法門ヲ可書也。」「法語等ヲ書クニモ… 語言文章ハイカニモアレ、思フママン理ヲツブツト書キタラバ、後來モ、文章ワロシト思フトモ、理ダニモキコヘタラバ、道ノ爲ニハ大切也。」(正法眼藏随聞記三の9)

つまり師から伝授された仏陀の教えを断絶させぬためには、その理解したことを書きとめることが必要だということです。ところがこの「正法眼藏」における道元言葉は、二元的相対的論理を表す言葉ではなく、道元がその悟りの奥底からしぼり出した「菩提語」であり、既成の言葉がない場合は自ら創造したものであります。⁽⁶⁾

この「菩提語」は従って二元的論理では理解しにくい言葉ですが、禅の修業をする者には、その禅境の進歩により次第にわかってくる言葉であり、時代、世紀を超えて仏の教えを後世の仏道修業者に伝える能力を持っているのです。

そしてこの「菩提語」こそは禅文学の特殊性の主体をなすものであります。

Ⅲ 道元の教えと良寛

この実例として、道元が没してから五百年余り後（1758）に生まれ、その師大忍国仙から「正法眼藏」の提唱を受けてから豁然として眼を開き、玉島の円通寺をあとにして各地の寺院に老師を訪れて教えを乞い、各寺に散在している「正法眼藏」の写本を拝観し、それを理解して文字通りに実行した良寛があります。

このことは良寛自身「永平録ヲ読ム」の中で言っています。⁽⁷⁾

暗裏ニ模索ス永平録
香ヲ焼^たキ燈ヲ点ジテ静カニ披キ見ルニ
一句一言皆珠玉タリ
憶イ得^{ちゅうせき}タリ疇昔玉島ニ在リテ
先師提持ス正法眼
当時已^{すで}ニ景仰ノ意有り
爲ニ拝閲ヲ請イ親シク履踐ス
始メテ従前ノ漫ニカヲ費セシコトヲ覚リ
是ニ由リ師ヲ辞シテ遠ク往返ス
嗟々^{あゝ}永平何ノ縁カ有ル
到ル処逢着ス正法眼

では道元の教えのうち最も重要なことで良寛が実行に移したことは何でしょうか？

それは第一に身心脱落して他を救うことです。道元は「正法眼藏」「現成公案」の中で言っています。

「仏道をならふといふは自己をならふ也。自己をならふといふは、自己をわするる也。自己をわするるといふは、万法に證せらるるなり。万法に證せらるるといふは、自己の身心および^た己の身心をして脱落せしむるなり。」

道元は師の明全と共にはるばる中国に行き、二年間空しく師を探したあげく

遂に天童山で如浄に会い、彼の指導のもとにきびしい修業を続けた結果或日忽然として悟り、如浄はこれを「心身脱落、脱落身心」と表現して印可を与えます。

道元は自我の否定が他の救いに結びつくことを「発菩提心」の中ではっきりと云っています。「発心とは、はじめて自未得度先度也の心をおこすなり。これを初菩提心といふ。」そして「出家功德」の中では「善覚トハ一切衆生ヲ憐愍スルコト猶ホ赤子ノ如シ」と言い、「菩提薩埵四攝法」の中では「慈悲」という言葉の代りに「愛」という言葉を使って「愛語」を弟子にすすめます。

五世紀半後（1776頃）、当時越後をおそった水害、凶作、疫病、また過酷な労働条件に苦しむ漁夫、農民の姿に心を痛めた良寛は、京屋、敦賀屋との確執に忿怒し、やがて尊皇反幕の政治運動に参加していく詩人肌の父のもとで始めた名主見習の役を返上して人民を救う一番根本的な方法は仏教によるものと決心して⁽⁸⁾、22才で故郷を後にし、岡山の玉島円通寺の師国仙のもとで十余年修業したのち、首座の地位に上り、師の亡くなる数ヶ月前に印可を得、その後も数年間諸国行脚修業の旅を続け、各寺に部分的に秘蔵されている「正法眼藏」の写本を勉強して故郷に帰り、あちこちの空庵に寝起きし、清貧、孤独の乞食僧の生活を送ります。

ある曹洞宗老師によれば⁽⁹⁾、良寛が解脱の境に達したことは数々の漢詩に表れています。たとえば「清夜草庵裏 独り奏^{もつ}没絃琴 調ハ入りテ風雲ニ絶エ声ハ流水ニ和シテ深シ 洋々トシテ溪谷ニ盈チ 颯々トシテ山林ヲ度ル 耳聾漢ニ非ルヨリハ 誰カ聞カン希声ノ音ヲ」という詩では、彼は絃の無い琴をひき、その調べを聞いているのですが、彼は悟りの境地を没絃琴という菩提語で表現しているのです。⁽¹⁰⁾ そして彼はさとの境地を一人享有するに留まらず、それを詩に書き人に伝えようとしたのです。

良寛の救世済民の決心は、彼が玉島へ出発のため両親と別れた折に書いた「出家のうた」⁽¹¹⁾にのべられていますし、良寛が道元の「愛語」を暗記して殆ど文字通りに書き残している墨跡もありますし⁽¹²⁾、また良寛はあらゆる生き物を愛し、蚤蝨や鳥獣に暖い心遣いを示し、解良栄重が「良寛禅師奇話」の中で

証言しているように、盗人に唯一の布団を盗らせ、説教によらず、日常の行為によって人々にほのぼのとした安らぎと喜びをもたらしたのです。

第二に出家と貧と乞食の実行です。

これは道元が「正法眼藏随聞記」の中でくり返し弟子達に薦めている事で、その理由として仏陀が妻子、富を捨てて無一文となり、乞食によって修業を続け、悟りを得た例をあげ、出家、貧、乞食は仏道修業に最も適した道であると説明しています。そして「正法眼藏」「出家功德」の中では仏陀の言葉「我レ父母、兄弟、妻子、眷族、知識ヲ棄テテ出家修道ス」を引用し、「聖教のなかに在家成仏の説あれど、正伝にあらす。仏祖正伝するは出家成仏なり。」といっています。

良寛もまた出家して再び家に帰らず、貧と乞食を文字通り実行したことは、良寛の残した数多くの漢詩が示している通りです。⁽¹³⁾ その中の一つで彼ははっきりと乞食は仏陀の例に倣うものだと言っています。

托鉢

八月初一日

托鉢シテ市郷^{てん}ニ入ル

...

次第ニ乞食ス西又東

...

浄飯王子* 曾テ消息シタマイ *釈迦牟尼

金色頭陀** 親シク伝ヲ受ケタリ **摩訶迦葉

爾来二千七百有余年

我亦亦是釈子ノ子

一衣一鉢^{はるか さいぜん}廻ニ灑然タリ

君見ズヤ

浄名老人*** 曾テ道^いウ有リ ***維摩詰

食ニ於テ等シキ者ハ法モ亦タ然リト⁽¹⁴⁾

第三に座禅の実行です。

道元が只管打坐（ただひたすら坐禅すること）を薦めたことは周知の通りですが、良寛は円通寺時代には寢食を忘れて坐禅し⁽¹⁵⁾、それ以後は「昼ハ城市ニ出デテ 行 食ヲ乞イ 夜ハ品下ニ帰リテ坐シテ禅ニ安ズ」という毎日を送り、「我モ亦タ僧伽ノ子、豈空シク流年ヲ渡ランヤ」といって坐禅にはげました。また「静夜虚空ノ下 打座衲衣ヲ擁ス 臍ハ鼻孔トニ対シ 耳ハ肩頭ニ当リテ垂ル」の詩は彼が「正法眼藏」の「普勧座禅儀」に忠実に坐禅を行っていたことを示します。⁽¹⁶⁾

けれども良寛は山水草木の美しさや香りにひかれて、終日屋内にこもっていることが出来ず⁽¹⁷⁾、野山を独り歩きながら彼流の動的な坐禅も行っていました。そして次の様な気になる言葉を残しています。

古仏ノ経ヲ持スルト雖モ 祖師ノ禅ニ参スルハ懶シ…

一タビ法舎ヲ出デテヨリ 錯ツテ箇ノ風顛ト為ル（相馬御風版による）

つまり自由人良寛にとって伝統的な禅堂で坐禅は窮屈だ。自分は僧堂を離れてから誤って風流を好む気違いとなってしまったと言っていますが、これは一人悟りの境地を享有しつつ没絃琴を弾く良寛を思い起こせば、道元流の厳格な坐禅を長年行ったあと、良寛が自由広大な禅境を開いた事を意味します。なお円通寺の矢吹活禅和尚は、これは国仙のすぐれた教育法によるものだと言っています。

第四に良寛は如浄が道元に与えた忠告、「城邑聚落到住するな。国王大臣に近づくな。ただ深山幽谷に住して一個半個を接得せよ。」を文字通りに実行し、権力者と交わらず、始めは海辺や山の空庵に住み、そのあと国上山の五合庵、次に山中の乙子神社わきの廃屋に独り住んで、道元が「山水経」の中で「而今の山水は古仏の道現なり」、つまり山水は仏陀の教えを目前にくりひろげるお経であるという教えに忠実に、山水草木を友とし⁽¹⁸⁾、それらと一体となってその中に生きたのであります。

良寛は道元が後継者懷昇を養成した様に、一個半個に燈を伝えませんでした。が、その代り彼が毎日托鉢の折りに接した無名の老幼男女、また彼を泊めたり、彼に生活必需品を提供したり、彼と交友文通した地方の篤志家達に彼の身心脱

落の成果である自由と安らぎと喜びを伝え、彼の作品と同時代人達の言い伝えによって、その教化は二十世紀の現代人にまでも及んでいます。

第五に良寛は道元より常に源に遡る精神、つまり常に仏陀の教えと行いを範とする精神を学びました。道元は師如浄から仏の教えそのままを伝授されたと確信し、この教えの集大成に仏陀が摩訶迦葉に正伝したと言われる「正法眼藏」の名をつけ、この教えに禅宗という部分的限定的な名を与える事を厳しく批判したのです。⁽¹⁹⁾ 事実道元は中国人の師と漢訳仏典に依りながらも、宗派分裂以前の原始仏教に到達し得た極東でも稀な仏祖⁽²⁰⁾ですが、この道元の教えを忠実に実行することによって、良寛もまた、彼自身言うように、「釈子」つまり釈迦牟尼の弟子となり、その教えそのものを実行することが出来たのです。

以上で良寛は道元の教えの重要なものをすべて理解したことがわかりますが、彼は又道元の重んずる法華經⁽²¹⁾をも勉強して解脱し、辞世として、道元の道詠歌、「春は花夏ほととぎす秋は月 冬雪さえて冷しかりけり」に似た「形見とてなにのこすらむ 春ははな何ほととぎす秋はもみじば」を書き残したのです。

IV 文学作品の読者との関係、良寛の独創性

ここでひとつ注目すべきことは、道元の教えに忠実に従いながら、良寛は、当時の幕府の宗教政策によって生活と檀徒を保証され、仏道の本随とも言うべき出家、清貧、乞食、修業の精神を忘れて墮落した同時代の僧侶の多くを批判して有名な「僧伽」という詩を書き、禅道場の枠から外れた独自孤高の禅修業の道を歩み、道元の「不離叢林」つまり禅僧は禅道場を生涯離れぬとの原則を破ったことです。また彼は、道元が「正法眼藏」「正法眼藏隨聞記」に結晶させた菩提語を読み、その主な教えを実行しながらも、古来禅道場で実施さるべき清規の数々、道元が「永平清規」の中で規定した数々の細かい規則や儀礼から完全に解放され自由人として生き、良寛独得の禅を実行したことです。

道元が、日々身近に良寛の行為を見守り叱咤する生ける師でなく、「正法眼藏」という書き物を通して語りかける死せる師であったため、良寛は自分にあ

わない教えを取り入れない自由を持っていたのでした。彼が寒山の詩から受けたと言われる風狂、彼の老荘風の自然観、また彼自身の飄逸さなどは、厳格な道元の教えからは生まれ得ないものであります。ここに生きた師による日々の密接な面援と、菩提語による自習との違いが現れているように思われます。それが道元の忠実な弟子、従者、後継者であった懷辨と五世紀余をへだてた忠実にして自由な弟子良寛との違いとなって現れたのであります。

この実例によって、禅文学も、いかに菩提語で構成されているとは言え、普通の相対的な論理を表す言葉で綴られた文学作品と同じく、読者の共感と協力によって始めて生命を持ちうるという、文学作品に共通な受動性の運命をになうものであることがわかります。良寛が「読永平録」の中で言うように、彼が塵、埃の中に埋もれていた道元の「正法眼藏」を拝読して、感動の涙を流した時²²、道元の教えは始めて理解され、生きたのであります。

この峻厳な師の著作の受動性はしかし良寛に自由にその創造性を生かし、独自の禅境を開き、それを詩に歌に書に表現する機会を与えたのであります。

〔註〕

- (1) Marcel Proust: A la recherche du temps perdu éd. La Pléiade. t IV .
le temps retrouvé. p 895.
- (2) 南禅寺を上におく京都五山（天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺、万寿寺）と鎌倉五山（建長寺、円覚寺、寿福寺、浄妙寺）の十官寺。
- (3) 「聯燈録」、「無門関」等によると釈尊が摩訶迦葉に依心伝心正法を伝えた時に、「吾に正法眼藏涅槃妙心実相無相微妙の法門有り。不立文字教外別伝、摩訶迦葉に附属す。」と云ったと云われる。一切を照破し一切を包含するこの仏教の根本真理を正法眼藏という。
- (4) 七仏通誡偈の一、即ち諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏教。
- (5) 「正法眼藏隨聞記」長円寺版、三の6、7、9等。
- (6) 道元の言語観については、竹内牧男：「良寛の詩と道元禅」（昭53 大蔵出版社、p 225 以下）及び「道元の言語哲学」（講座道元4、「道元思想の特徴」第7章、昭55 春秋社 p p 191-215）にすぐれた説明がある。

- (7) 「読永平録」には幾つかの墨蹟があり、その間にかかなりの差がある。
- (8) 今枝愛真「道元とその弟子」昭47 毎日新聞社 p 191 「良寛は…この世に光明をもたらすことができるのは仏の道のほかにはありえないと痛感し、救世済民のためにすすんで出家求道の道をえらんだものと思われる。」
- (9) 板橋興宗「良寛さんと道元禅師」昭61 光雲社 p p 250-251
- (10) 良寛の琴に関する一連の詩の禅的解釈については、朝倉尚「良寛の詩歌にみる「ことば」と「心」」(三)「心裡無絃琴」in宮栄二編「良寛研究論集」昭60 象山社 p 211-223 が興味あり。
- (11) 渡辺秀英「良寛出家考」に収録、解説される。
- (12) 島崎の木村元石衛門の子孫、木村元周氏宅。
- (13) 「十字街頭乞食了」、「今日乞食逢驟雨」、「維時八月朔」、「昨日出城市、乞食西又東」、「晨朝持枝錫、乞食入市廛」、「終日望烟村、展転乞食乞」、「空盂二首」、「城中乞食了」、「終日乞食罷」等々。
- (14) 東郷豊治「良寛詩集」昭57 創元社 p p 16-17 今枝愛真は「道元とその弟子」p 191 の中で、良寛は「原始仏教的な頭陀行（乞食行とも托鉢行ともいう）に修業の本来の姿を見出した」と言い、彼は国仙のもとで道元禅の真髓を徹底的に学びとったに違いないと言っています。
- (15) 「我昔静慮ヲ学ビ 徴々トシテ氣息ヲ調ウ 是ノ如クニシテ星霜ヲ経 殆ンド寢食ヲ忘ルニ至ル」
- (16) 中村宗一「良寛の偈と正法眼藏」昭59 誠信堂書店 p 283
- (17) 自筆本「草堂集」 「時ニ菊幽香ヲ発シ 山川秀奇多シ 人生金石ニ非ズ 境ニ対シ心ハシバシバ移ル 誰カ能ク一隅ヲ守リ 兀々鬢糸ヲ為レンヤ」
cf. 長谷川洋三「良寛禅師の宗教」(六)「道元禅師との相違」in「良寛研究論集」p p 324-375
- (18) 「耒韻二次ス 頑愚信ニ比無シ 草木以テ隣ト為ス…」
「己ニ華情ノ起ル無ク 山水俱ニ隣ト爲ス」
- (19) 「正法眼藏」「仏道」「釈迦牟尼仏より曹谿にいたるまで三十四祖あり…

正法眼藏まのあたり嫡嫡相承しきたれり。仏法の正法、ただこの正法の
みなり…しかあれば仏道の功德、要機もらさずそなはれり…この道理を
参学せざるともがら…みだりにこれを禅宗と称す…しるべし禅宗の称は、
魔波旬の称するなり。」

- (20) 木村清孝助教授によると、道元は中国で生まれた禅宗を突き抜けて仏陀
に到達した稀な仏者の代表です。水野弘元「ゴータマ・ブツダと道元」
(in講座道元5「世界思想と道元」昭55 春秋社 第12章 pp71-107)
は仏典に依りこれを示す。

- (21) 「正法眼藏」「帰依仏法僧宝」「法華経は諸仏如來一大事の因縁なり。大
師釈尊所説のなかには法華経これ大王なり。」道元と良寛の法華経観に
ついては、石付膳龍「良寛和尚の宗教 — 評釈 法華転、法華讃」昭55
新潟県曹洞宗青年会 参照

- (22) 五百年未塵埃ニ委シハ

職トシテ是レ法眼ヲ扱ブノ無キニ由ル

滔々皆是レ誰ガ爲ニカ拳スル

言ウ莫^{*}ジ今ニ感ジテ心曲ヲ勞スト

*古ヲ懷シミ (異本)

一夜灯前ニ涙留マラズ

湿イ尽ス永平ノ古仏録

【参 考】

愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこす
なり。おほよそ暴惡の言語なきなり。世俗には安否をとふ禮儀あり、佛道には
珍重のことばあり、不審の孝行あり。慈念衆生、猶如赤子のおもひをたくはへ
て言語するは愛語なり。徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし。愛語をこ
のむよりは、やうやく愛語を増長するなり。しかあれば、ひごろしられずみぎ
る愛語も現前するなり。現在の身命の存せらんあひだ、このんで愛語すべし、
世世生生にも不退轉ならん。怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語
を根本とするなり。

むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。しるべし、愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻夫のちからあることを學すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず。

(大久保道舟編「道元禅師全集」上巻 筑摩書房)

愛語ト云ハ 衆生ヲ見ルニマツ慈愛ノ心ヲオコシ 顧愛ノ言語ヲホドコスナリ。オヨソ暴悪ノ言語ナキナリ。世俗ニハ安否ヲトフ礼儀アリ。仏道道(重字)ニハ珍重ノコトバアリ。不審ノ孝行アリ。慈念衆生猶如赤子ノオモヒヲタクハヘテ言語スルハ 愛語ナリ。徳アルハホムベシ。 徳ナキハアハレムベシ。愛語ヲコノムヨリハ ヤウヤク愛語ヲ増長スルナリ。シカアレバ ヒゴロシラレズミヘザル愛語モ現前スルナリ。現在ノ身命ノ存スルアヒダ コノンデ愛語スベシ。世々生々ニモ不退転ナラン。怨敵ヲ降伏シ君子ヲ和睦ナラシムルコト 愛語ヲ本トスルナリ。向テ愛語ヲキクハ ラモテヲヨロコバシメ コ、ロヲ楽シクス。向カハズシテ愛語ヲキクハ 肝ニ銘ジ魂ニ銘ズ。シルベシ愛語ハ愛心ヨリオコル。愛心ハ慈心ヲ種子トセリ。愛語ヨク廻天ノカラアルコトヲ学スベキナリ。タゞ能ヲ賞スルノミニアラズ

(東郷豊治「良寛全集」上 創文社)